

歴史的な経緯を踏まえながら、 現代を見る！

現在を理解するために過去を学び、過去を知ることによって現在が見えてくる——政治史や外交史を学ぶ意義もここにある、という服部先生。

歴史的なアプローチを用いて、国際政治や外交の問題を研究しているのだ。最近、日本と中国・韓国の間で起きている歴史認識問題なども格好の研究対象。評伝も数多く執筆している。

さっそく研究室を訪ねインタビュー。椅子にゆったりと腰掛け、静かな雰囲気の中で明快に話される服部先生からは、学問への情熱がひしひしと伝わってくるようであった。

高校のころから政治に関心を持つ。大学のゼミでさらに関心を深め、研究者になるうと心に決める

「小学生・中学生のころは、クラブに入って野球やサッカーに熱中している、ごく普通の少年でしたよ。漠然と政治や法律に興味はありましたが、将来の進路として考えるようになってからは、大学受験を意識するようになった高校2年くらいからです」

高校生のころは社会問題にも目が向くようになって、新聞を読んだりして政治にも少しずつ関心が深まっ

ていった時期という服部先生。法学部に入って政治を学ぼうという気持ちには持っていたが、まだ政治学の中の何を勉強したいか、具体的に考えていたわけではない。そして、京都大学の法学部に進んだ。

「京都大学の法学部には、政治系と法律系の両方がありました。私は法律より政治を学びたかったので、政治系の科目を多く取り、ゼミも政治系にしました」

大学で学び始めた服部先生は、やがて研究者への道を意識し始めるようになる。その学生生活は、大学の寮から始まった。

「ぼろぼろだったけれど、とにかく安かったですね。私は途中で出ましたが、寮の生活というのは独特のものがあって、今も付き合いが続いている友人もできました」

服部先生は、2年、3年のとき中国与ヨーロッパに旅行し、見聞を広めた。その資金を稼ぐために、数カ月集中して新聞配達のアルバイトもしたという。

「特にこれを勉強しよう、と目的を持って海外に旅行したわけではありません。ただ、2年のときにはちょうど中国の天安門事件が起きて、中国はどうなっているだろうと。また、

ヨーロッパでも東西ドイツが統一するとか、ソ連が崩壊するなどいろいろ大きな出来事がありましたから、それで中国やヨーロッパに関心を持つたのでしょう。今思えば、本当に激動の時代だったんですね」

中国に関しては、旅行の後にも夏休みの語学留学で約1カ月間、中国語の先生の家にホームステイをしたそう。

「ヨーロッパに行ったとき、1990年の8月だったと思いますが、湾岸危機が起こり、ヨーロッパでは問題視され国際関係が活発に動いていました。ところが日本に帰ってみる



服部 龍二 (はっとり りゅうじ)

東京生まれ。京都大学法学部卒業。神戸大学大学院法学研究科博士後期課程満期退学。博士(政治学)。千葉大学大学院助手、書に『東アジア国際環境の変動と日本外交 1918-1931』、『広田弘毅』、『日中歴史認識』、『日中国交正常化』、『増補版 幣原喜重郎』、『佐藤栄作』、『高坂正堯』、『増補版 大平正芳』など。

と、当時「平和ボケ」という言葉が使われましたが、日本の外交は何をしようとしているかよく見えない。ちよつと歯がゆさを感じたことを覚えています」

こうして海外の出来事に関心を強める一方、大学のゼミを通して政治の研究にも強く心を惹かれるようになった服部先生。研究者になりたい、

と考えるようになったのだ。「大学2年のころには、大学院に行つて研究者になりたいと思うようになりました。大学のゼミは、1年のときに政治理論、2年のときに外交史、3〜4年のときに行政学でしたが、これらのゼミで興味を深めたことが大きかったですね」

専門分野は政治学の中の政治外交史。第一次世界大戦後にスポーツを当て、激動期の日本外交を研究

「私の専門分野は政治学で、その中でも日本を軸とする政治外交史です」

という服部先生。実は、外交史に興味を持つきっかけとなったのは、大学に入つてすぐのころに読んだ『外交50年』という幣原喜重郎の自伝だったそうだ。

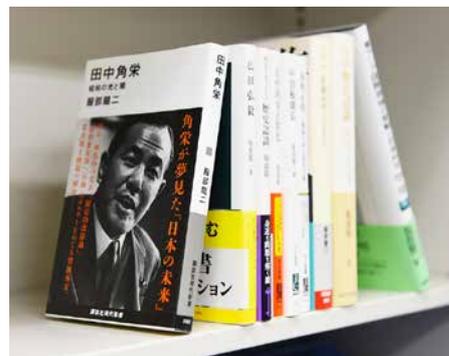
大学院に進み研究者への道を歩き始めた服部先生が、大学院の博士論文で取り上げた研究テーマは「1920年代の国際政治」。第一次世界大戦後から満州事変にかけて、パリ講和会議やワシントン会議から始まる激変期に日本はいかに対応し、最後は満州事変でなぜ国際秩序は破綻したか。国際秩序の形成と日本側対応という両面から見ようとした。

服部先生はその後もずっと、第一次世界大戦以降の政治・外交の動きに関心を持って、いろいろな形で研究を進めている。

なぜ、第一次世界大戦後の時期なのか。

「第一次世界大戦のころというところごく古く感じるけれど、実は現代的な意味を非常に持っている時期だと思ふんです。第一次世界大戦後というのは、初めてアメリカが国際政治に台頭していった中で、日本としてもアメリカとの関係を重視し始めた最初の時期なんです。現在の日米関係を考える上でも、起点になるようなところがあります」

現在も中国の台頭に日本がいかに対応するかというような問題があるけれど、1920年代の後半にも同様な議論はあった、と服部先生はいふ。現代的な関心からその起点をた



服部先生は、たくさんの論文を発表し、また著書も多い。これはその一部。



服部先生は、増補版『幣原喜重郎』も刊行している。幣原喜重郎は日本を代表する外交官で、戦前に外務大臣となり、戦後アメリカ軍の占領下で首相を務めた人物。学生時代に読み、外交史に関心を持つきっかけを与えてくれた『外交50年』の著者でもある。その幣原喜重郎の伝記的な

どつていくと、第一次世界大戦後あたりから見ることで、本当の意味での国際政治を歴史的・構造的に把握することができるという。

服部先生は、『増補版 幣原喜重郎』も刊行している。幣原喜重郎は日本を代表する外交官で、戦前に外務大臣となり、戦後アメリカ軍の占領下で首相を務めた人物。学生時代に読み、外交史に関心を持つきっかけを与えてくれた『外交50年』の著者でもある。その幣原喜重郎の伝記的な

研究によって、20世紀の日本を振り返ってみようとしたのである。

「政治の現状を追うよりも、その背景にある構造や歴史から解き起こしていく。それが自分のスタイルです」

という服部先生は、博士論文を書いたところにマクロの視点でとらえた第一次世界大戦後の日本外交を、今度は一人の外交官というミクロの視点で見直そうとした。『広田弘毅』『日中歴史認識』『中国外交正常化』『外交ドキュメント歴史認識』『中曾根康弘』『田中角栄』『佐藤栄作』『高坂正堯』『増補版大平正芳』なども執筆した。

大切なのは

読書や授業を通して自分の歴史観を組み立てること

「私たちの学生のころは、勉強しようとする」と本を読むくらいしかな

かったですね。しかし今は、インターネットや衛星放送など、メディア媒体が多様化しています。その分、活字に触れる、本を読むという割合が減ってきている。そこに危機感を抱いています」

という服部先生。授業では、できるだけ一つの科目で1冊の本を読みレポートを書くように指導しているそうだ。特に、大学に入って間もない1年生のうちに、本を読む習慣をつけさせたいという。

「私は学生たちに、よくこう言うんですよ。1日のうち、朝起きたときに30分あるいは寝る前に20分でもいいから時間を決めて、この時間帯だけは読書に当てるようにしましょう。全然本を読まない日がないようにしましょう」

思考力や表現力は読書と密接に関連している。早い時期に読書の習慣をつけておけば、大学の勉強だけでなく、社会に出てからも大変役立ちます、と付け加えられた。

現在、学部と大学院のゼミで数名が研究している。「ゼミの研究では、例えば、PKO、

ODA、日米関係、日中関係、日本外務省の機構などについて研究をしている学生がいます。学生さんたちは外務省当局に行つてインタビューしたり、情報公開された外務省の資料を集めたりして、非常に冷静かつ実証的にとらえて論文を仕上げます」

これは大学院のゼミ生のケースで、3〜4年生のゼミでは、初めにテキストとして通史的なものを学び、そのあとに外交官の自伝などを読むことが多いという。今は、太平



先生の講義に参加する学生達



授業では学生との対話を通じて、理解を深めていく。

洋戦争期と戦後に外務大臣を務めた重光葵の『外交回想録』をもとに、日本外交を勉強中だという。こういう本を読むと、当時の外交現場の雰囲気や学生にも伝わり、その臨場感がとても効果的なのだそうである。「学部ゼミ生では、中国のWTO加盟に日本はどう関わるか、というような研究をして素晴らしい卒論を

書いた学生が印象に残っています。彼女は数年前に外交官になり、カナダに留学しました」

活字にしてみても初めて自分の言いたいことが分かるという面もあるのですが、学生がゼミで論文を書くというのとはとてもいいことです、と服部先生。ゼミの授業を通して、表現する力とともに、自分の歴史観・世界観を作っていくことの大切さを強調する。

「このゼミでは政治外交史という、学生からいえば古い時代を扱っていますが、その歴史に対する見方は非常に多様です。その多様な歴史観の中で、自分にとっての歴史や世界観をどのように自力で組み立てていくか、その面白さと難しさがあります。史料に基づきながら、実証的に歴史像を組み立てていく。そのことによって、現代国際政治に対する洞察力がついてくるんですね。過去の事件や教訓から学ぶ、歴史的な経緯を踏まえながら現代を見るという習慣を身につけて欲しいと思っています」

さらに、自分で修得したものをど

う伝えていくか、コミュニケーション能力も必要だという服部先生。ゼミや授業を通して、政治外交史の知識だけでなく、伝える力を養成し磨きをかけていくことを目指しているのだ。

高校生の皆さんへ

服部先生は、高校生のうちに二つのことを勉強してほしい、とアドバイスする。

「一つは語学です。ほとんどの人は英語になると思いますが、単に受験勉強としてではなく、できれば短期間でも海外留学やホームステイを体験するのもいいでしょう。語学ができる、いろいろな面で可能性が広がります。もう一つは、歴史です。歴史を勉強しておく、と、大学に入ってからでも役立ちます。私は政治外交史を教えています。例えば、吉田茂など歴史上著名な個人名が出たりしても、学生は意外に知らないことが多い。基本的な歴史は押さえておかないと応用がきかず、ほかの



授業では、レポートを書いてもらうという服部先生。読書の習慣をつけることの大切さを強調された。

勉強をやっているにもかかわらず理解が十分に深まりません」

そして、今のうちから社会問題への関心を高めたいという服部先生。そのために新聞を読もう。インターネットで海外のニュースを見るのもいい。「外交問題のことなら、相手国の立場でも考えてみるような複眼的な思考方法を養うことも大切です」と付け加えられた。